

■■■ 研修会「発達障害～外国にルーツを持つ子どもへの視点も持ちながら」を開催して ■■■

2月20日(火)18:00～20:00に、関西学院大学人間福祉学部の井出浩教授にお越しいただき、「発達障害とは～外国にルーツを持つ子どもへの視点も持ちながら」というテーマでお話しいただきました。

これは外国にルーツを持つ子どもが、言葉ができない、文化が違うということから落ち着きがなくなってしまう「発達障害」にされてしまったり、また言葉がわからないだけだろうときちんと診察をうけられなかったりという様子が見受けられることから、正しい知識を持ち、関わり方や支援への繋げ方を学ぼうと企画したものです。

初めに発達障害に含まれる障害について、自閉症スペクトラム障がい（広汎性発達障害）（ASD）（以下、自閉症）、学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）があり、これらが重なっている場合もあること、それから、自閉症の臨床像（一人遊びを好む、理由のわからない癇癪を起す、自分のやり方にこだわり状況の変化に合わせることができない、他人と上手に遊べない、相手の気持ちや意図がくみ取れない、暗黙の了解ができない、言葉を字句通りに受け止める、曖昧な表現を理解できない、悪気なく、つい失礼なことを言ってしまうなど）について具体的な事例を踏まえてお話がありました。

次に、自閉症の特徴（社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害とそれに基づく障害、感覚刺激への過敏さや鈍感さがあるなど）、理解やサポートするにはどうしたらいいかについてお話がありました。自閉症の子どもは、他者への関心が薄いので、人と関わることの楽しさを感じてもらうこと、子ども対子どもにするのではなくできるだけ大人が介入することで楽しさを感じるようになることや、特に人を介しての情報の取り入れに偏りがあるので、人と関わる方法、社会生活をするためのルールなどについてわかりやすい情報提供をする、強いこだわりがあることについては、「マイペース」を保証する、子どもの世界が広がるのを待つ、タイムリミットやゴールを作らないことが重要とのことでした。

また幼児期に比べて、児童期は特徴を際立たせ始めますが、障害と決める前に関わりを考える、また子どもの行動の中にどれだけ大人がいられるかが大切とのことでした。

外国にルーツを持つという背景を踏まえると、その子どもの日本語力をどう受け止めるか、日本語力を過大評価していないかを考える、「わかった」と言われたときに本当にわかっているのか、自分が経験したことと感想を話すことができた時に、例えば何がどう面白かったか具体的に言うことができるかということまで考える、また文化の違いによって情報がしっかり理解できていないのではないかと考えるという、簡単に障害があると判断してしまいう前に考えるべきことについてお話しいただきました。

質疑応答では、「外国にルーツのある子どもは、小さいときは特に日本人の子どもに比べて言葉が遅れていることが多いですが、それでも早期発見と言われる今、診断を早くに受けさせた方がいいのでしょうか」という質問がありました。先生からは「診断を早くした方がいいとは思わないが、その子の特徴を知る必要はある。子どもは困っているから、大人が手助けをしてあげることが重要。障害があると思って関わる必要は全くない」というお話がありました。また普遍的なこととして、障害の有無に関わらず、言葉の理解を確認することの重要さも話されました。

井出先生のお話の中で、大人の関わりを増やせば、成長するし、変わることができる、こちらで勝手に思い込まずに丁寧に聞き取る作業が必要であるということが心に残り、学校に比べると関

わかることのできる時間は少ないものの、個別に対応できる時間を持ちやすいKFCのような団体でできることを改めて考えさせていただけた、非常に学びの多い研修会でした。（志岐 良子）

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆研修会「生活に必要な日本語とその支援方法を考える」

1月27日、兵庫県国際交流協会日本語講師・板持佳代子氏を講師に迎え、上記のテーマで学習支援者向け研修が開催されました。学習者に何から教えるべきかは、支援者にとって悩みのひとつ。講師は、学習者の視点にたち、必要としている表現から教えることが重要だと話されました。来日した事情は様々ですが、学習者にとって日々の生活は分からないことだらけ。買い物、電車の乗り方、ゴミの出し方など使用頻度が高い、生活場面で適切に対応するために必要な表現を優先的に理解してもらうことが、環境の変化に伴う学習者の不安の解消と自信・安心につながることも仰っていました。

続いて、3グループに分かれ、いくつかのシーンにおいて知っておくべき日本語表現は何か討論を行いました。例えば電車で目的地まで行くために必要な表現として、自動券売機の使い方、自動改札の通り方など日本の鉄道に特有な点を挙げる意見が多かったですが、「最低限、『～はどこですか？』『きっぷはどうやって買うのですか？』と、駅のスタッフに質問する表現を知っていれば、目的地まで行くことはできる」とコメントがあり、困ったときに対応するための表現を知っておくことの重要性を全員で共有しました。

かつて「漢字たまご」監修の嶋田先生の研修で「まず、第2課から教えて下さい。数字に関する漢字があり、買い物に行ったときに値札を見たり、特売品を見付けたり生活に直結した内容が学べますから。」と仰っていたことを思い出しました。現在の学習者には、学習開始前に十分希望調査することなく「みんなの日本語」をベースに教えていますが、学習者から具体的に希望の提示があれば、思い切って教科書を変えることも一案だと思うし、そのために、生きた日本語を学ぶ目的でフィールドトリップなど新しい趣向を採り入れられたらと思います。（藤井 尚志）

◆2017年度文化庁委託事業「成人の外国人の学習の場について考える」

研修セミナー『成人の外国人の学習の場について考える』が、2月17日に神戸国際協力交流センター会議室で開催されました。

【第一部】基調講演

「成人の外国人の学習の場について－成人基礎教育の視点から日本語学習支援を考える－」

野元 弘幸（首都東京大学教授）

野元先生は、マイノリティや被差別者、社会的不利益層の人間的な解放を目指す教育実践で世界規模で影響を与えたブラジルの教育者パウロ・フレイレに師事し、帰国後、日系ブラジル人・ペルー人の集住地域の豊田市保見団地での種々の支援やブラジル人学校などの設立・支援や社会教育における防災教育に携わっています。以下、野元先生のご講演の概要です。

「多文化・多民族共生が叫ばれていますが、現実にはなかなか進んでいない状況があります。外国人への差別・人権侵害は減っておらず、日本語教育法制化や日本語学習への公的な支援は依然遅れています。文化

審議会国語分科会日本語教育小委員会の『日本語教育人材の養成・研修の在り方』に対して、日本語教員として、教育学に関する専門的知識を持つ人材、英語に限らずいずれかの言語で母国

語者と一定のコミュニケーションがとれる程度の言語能力を持つ人材、外国人差別やヘイトクライム等について学び、公平で寛容な社会の実現に取り組む“態度”を持つ人材を育てる必要があること、日本語教員養成・研修や配置に関する規定を教育法体系に位置づけるべきなどと提案しています。

外国人住民及びその子どもの教育の課題としては、日本で働き、健康で文化的な生活を送るための日本語運用能力習得のための“日本語教育”、日本で働き、生活する上で必要不可欠な基礎的な知識や情報を得る場としての“市民教育”、母語の使用や母文化に関わる文化活動を通じて、自らの精神的・心理的拠り所を失わずに保持するための“文化的アイデンティティ”、母国における自らの職業能力や経験を日本においても発揮し、さらに日本での労働の経験を母国での労働に活かせるようにする“職業・技術教育”等が挙げられます。

日本においても、公立夜間中学の先生の尽力で、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」が制定され、その基本指針の中に、夜間中学校において、本国において義務教育を終了していない外国籍の者、不登校など様々な事情から実質的に十分な教育を受けられないまま学校の配慮等により卒業した者で、中学校等で学び直す事を希望する者を受け入れるという多様な教育機会の提供が可能となっています。

年齢・国籍にかかわらず夜間中学等で受け入れることが可能となり、教育活動を充実されると共に、受け入れる生徒の拡大が図られています。」

【第二部】パネルディスカッション

「各団体の活動の成果と課題」

コーディネーター：青木直子（大阪大学大学院教授）

パネリスト：

田中洋平（神戸市教育委員会生涯学習課指導主事）

小林真由美（神戸国際協力交流センター運営課課長）

朴洋幸（大阪府八尾市トッカビ代表）

各機関・団体から、学習の場の紹介・成果と課題についての説明があり、それに関する質問・回答がありました。単に日本語を教えるというのではなく、当事者が自立できるような支援、インシアティブが取れるような支援が必要であること、また、学びの場を社会教育の一部としていかに提供するかが重要であるとの説明がありました。（ニュース係 川淵 啓司）

◆「インドのお正月」

KFCで日本語サポートを始めて3年近くになります。現在の学習者はインド人の青年で1年半の付き合いです。彼はインド南西部のアラビア海に面したケララ州の出身でムスリムです。

日本で2回目の正月を迎えたのでインドの正月について聞いてみました。

インドの人口は我が国のおよそ10倍はありますし、多民族多言語の国家です。正月のような祝日は宗教によるところが大きく、インド人の大半はヒンズー教徒ですが、彼はイスラム教徒なのでその様子を紹介します。

当然ですが日本の正月とは随分違います。いわゆる大晦日、元旦、初詣やお節料理などの正月行事や風物や休日は一切ありません。そもそも新年はイスラム暦（別名ヒジュラ暦）によって決められているので、今年は西暦で9月11日になるそうです。その新年の始まりの日も一日5回のお祈りをするだけで特別なお祝い事は何もしないとのこと。日本の正月に近いのはラマダン明けのお祭りになります。

（日本語学習支援者 吉村 仁）

◆ヒジュラ暦とは？

ヒジュラ暦とは、イスラム諸国で採用している暦で、預言者ムハンマドが遷都（ヒジュラ）した年が、ヒジュラ暦元年です。西暦では622年にあたります。ヒジュラ暦は太陰暦で、新月から新月までを1ヶ月としています。月齢周期は平均すると29.5日なので、小の月（1ヶ月29日）と大の月（1ヶ月30日）を交互に繰り返しています。とすると12ヶ月を合計すると $29.5 \times 12 = 354$ 日になり、太陽暦より1年が11日（閏年は12日）短くなり、年とともに約11日ずつずれていき、約32年で元に戻ります。

■■■ ハナの会 ■■■

◆お正月のお話

ベトナムでは旧正月が近づくと老若男女、皆がワクワクしていました。28日は祭壇の清掃、チマキを作り、新しい服に試着したりしていました。

今のお正月は昔のようにはできません。子どもが学校や仕事があるため、家族がバラバラで集まりにくくなっています。日本で暮らす在日ベトナム人の親は、寂しく昔のお正月を思い出すしかありません。

2月15日ハナの会では、ベトナム人高齢者の「旧正月の集い」をしました。メニューは豚の角煮、もやし酢漬、豚ハム、発酵ハム、四角・丸いチマキで、ビンゴゲームもしました。

決して高価な食事ではありませんが、スイカの種をかじりながら昔の正月に語り合いました。おかげさまで、ベトナムではもう味わえない迎春の雰囲気味わうことができました。

（NGUYEN THI HGA）

◆節分

毎年2月には節分をデイサービスハナの会で行い、習慣として月の始めには行事があり、レクリエーションとして節分飾りを作りました。節分は季節の変わり目を意味するとても馴染みのある行事で、この変わり目で鬼は出ていくのです。ですので、デイサービスハナの会では鬼を外に出すための行事をしました。

利用者の出席が日によって異なるのでみなさんに体験してもらうために、3日続けて行いました。ここでは、食べると幸福を呼ぶ巻き寿司を食べました。巻き寿司は作るのが大変ですが、調理担当者の力のおかげで巻き寿司をみなさんに楽しんでもらえました。

そして、男性職員二人が鬼の格好をして、利用者には豆が入っている袋を1袋ずつ、鬼の登場の際に良い一年を迎えられるように豆まきをして大きい声で追い出しました。

この行事をしたことで、利用者が久しぶりに大きい声を出す機会となり、またみんなで大いに楽しめました。（塚本 澄子）

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆帰国者交流会春節祭に参加して

交流会に参加して早4ヶ月になりました。お人様のお役に立つボランティアが見つかり、良かったと思っています。

旧正月を祝う習慣が根強い帰国者のため、2/20（火）にふたば学舎の料理教室で春節祭が開催されるということで、参加させて頂きました。9時頃から数人の帰国者達が手際よく水餃子作りの準備を始めました。小麦粉で餃子の皮から作るのを初めて見たので、新鮮で驚きました。本場仕

込みの水餃子の味は格別で、特に皮がもちもちで、30個以上食べてしまい、大満足でした。ニンニク臭もなく、ポン酢味も誠に美味しかったです。

宴会途中のマーチ調の大合唱にはびっくりしました。聞けば50, 60年代の毛沢東の賛歌でした。隣席の方のお話では、1966年に17歳文化大革命の中での青春に歴史の凄みを感じました。いつか自分が中国語を分かる時がくれば静かにその体験を伺いしたいです。

交流会への参加回数が増えていく中で、帰国者達との交流を深めていきたいです。これからもよろしくお願い申し上げます。（高野 牧人）

■■■ グループホーム・小規模多機能型居宅介護ハナ ■■■

◆様々なお正月

今回は、私自身が勉強させてもらった、正月のお祝いの仕方について書かせていただきます。日本では、1月1日にお正月のお祝いをします。ハナでもおせち料理を用意し、三が日に近所の駒ヶ林神社に初詣に出かけました。

ただ、韓国、中国、ベトナム等、アジアの多くの国々では、お正月と言えば「旧正月」で、旧暦でお祝いをしています(韓国では、新暦でお祝いする家庭が増えているようですが)。それも国によって、お祝いの仕方が異なることを、今回改めて知る事ができました。

中国の利用者に話を聞くと、中国では、旧正月は「春節」と呼ばれ、家族・親戚が集まり、餃子を作り、正月を迎える0時には花火を上げてお祝いをするそうです。にぎやかなお正月で、楽しい思い出だったようです。その利用者は、持病があり中国に帰国することは難しく、また、家庭の事情で旧正月はハナに宿泊しないといけませんでした。0時に近づくと、時間を非常に気にされ、「今、中国では何時か」など確認されていました。今年は、日本にいる子ども家族とも一緒にお祝いできず、非常に寂しそうです。他利用者が餃子を作りお祝いをしている間中、餃子づくりには参加せずホームビデオで撮影していました。お正月には、家族の思い出がたくさん詰まっているのだと、改めて感じさせられました。

また、韓国の旧正月「ソルラル」という言葉を、今年初めて知りました。ハナでは、その時に召し上がる食事を用意し、利用者にキンパを巻き切ってもらいましたが、実際にどんなお祝いをするのか、今まで、きちんと知ることがなかったと反省をしました。

同じく、ベトナムでも旧暦でお祝いをします。テトと呼ばれ、盛大にお祝いをするようです。ベトナム人高齢者も利用され、ベトナム人職員もいますが、今まで、どのように祝うのかをきちんと知ろうとすることなく、それも、私自身の反省点です。

私は、日本の家庭で生まれ育ちました。お正月前には、親戚が集まり自宅でお餅つきをしていました。お餅つきの映像を見ると、小さいころ家族やいとこと過ごした時間が思い出されます。ハナで勤め始めてから、他国の文化を少しずつ知るようになりましたが、今回の事もあって、利用者が大切にしてきた季節ごとの習わしや風習について、もっと、知らないといけないなと感じました。ハナで十分に実現できないかもしれませんが、少しでも、故郷や昔感じた家族との暖かな絆を思い出せるような、そんなな時間を作っていけたらと感じています。（施設長 森 佳緒里）

■■■ 今後の予定 ■■■

■KFC帰国者新長田交流会

4月24日(火) 遠足

5月1日(火) 農園

■多文化子ども共育センター

1月6日(土)～3月24日(土)

就学前の子どものプレスクール事業